

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 2 章 6～16 節

○これまでの議論を整理すると…

- ・パウロの論敵たち→この世は愚かであって自分たちだけが真の知恵と知識の所有者であると誇り。自分たちは救いの目標に達した完全な者であると驕り高ぶって、礼拝の中で霊的熱狂状態になることこそその証拠であると主張していた。
- ・彼らの影響により、コリント教会の内部には様々な不和が生じていた。「わたしはパウロに」、「わたしはアポロに」、「わたしはケファに」、「わたしはキリストに」と、実際はパウロやアポロ、ペトロ、キリストのこと、またその思想などをきちんと正しく理解できてはいない、誤解、曲解しているのに、自分はこうした人々のこと、またその思想などに関わる知恵、知識を有していると誇りにして「自分たちが正しい。あなたたちが間違っている」と仲たがいしていた。
- ・こうした状況を前に、パウロは1：18～25で、そうした人間の知恵や誇りがいかに小賢しく、虚しいものかを強調する。イエス・キリストの十字架という人智をはるかに超えた神様の知恵を前にしては、パウロの論敵たち、またコリント教会内部で裁き合っている人々の人間の知恵など本当に取るに足りないものであり、ましてそれを誇りにするなど、そして人々を裁いて仲たがいを生み出すなど言語道断であるとメッセージを送る。
- ・さらにパウロは、1：26～31でコリント教会の人々に「兄弟たち」と呼びかけ、教会を形作った時のことを思い出させる。そもそもコリントの教会はその成立時、政治的・社会的に影響力を持った大物や上層階級の人たちはほとんどいなかった。神様は「世の無学な者」、「世の無力な者」、「世の無に等しい者」、「身分の卑しい者や見下げられている者」をあえて選ばれて教会を成立させたと言う。それはコリントにおける福音宣教によって、人の基準に基づく差別が乗り越えられるため、人の基準に基づく「無学な者」と「知恵

ある者」との関係や、「無力な者」と「力ある者」との関係、「無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者」と「地位のある者」との関係がひっくり返されるために他ならない。この神様の選びを前に、人々は人間同士の基準から離れて、「神の前」に自らの卑しさを徹底的に知らされ、その誇りを打ち砕かれる。人間的な誇りはまったく否定される。そこでパウロは「だれ一人、神の前で誇ることがないように」、「誇る者は主を誇れ」という呼びかけをし、そのように人々が謙虚になり、ただ栄光と賛美を神様に帰すところから教会内の不和を解消していくことを訴える。

- ・それだけではない。2:1~5 で、パウロはさらに自分がコリントで人々に最初に宣教した時の姿を思い起こさせる。自分は人間的に「優れた言葉や知恵」を用いなかったではないか。そんなものにより頼んだのではなく、ただ聖霊が自分を通して働き、コリントでの宣教を成功させ、神様の力を証明されたのだ。宣教は小賢しい人間の知恵でどうなるものではない。ただ聖霊の導きの下で豊かな働きが為されるのである。宣教の主体はあくまでも神様に他ならない。そのことを思えば、あなたたちが人間的な基準を誇りにしてお互いを裁き合うなど本当に愚かなことであることが分かるはずだと訴える。

○今回の聖書箇所(2:6~16)では…

- ・パウロはこの世の知恵とまるで異なる神の知恵を語る(6~9節の知恵論)。そして、この知恵はただ霊によって理解できると主張する(10~16節の霊論)。パウロの論敵たちが主張していたように、この世の知恵によって神の知恵を理解することはできないのである。ましてそれで「自分は主の思いを知っている。お前たちは知らないだろう」と人を判断し、裁き、さらに「主を教えてやろう」などと言うことは勘違いも甚だしいとパウロは論敵たちを暗に批判する。

#### 【注解】

- 「しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの

世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。」(6節)

・「成熟した人」=⊕「テレイオイス」(「完成者」、「目標に達した者」)

→これはパウロの論敵たちが自らに対して用いていた言葉。すでに述べたように、コリント教会の一部の人々は十字架の事実から切り離してキリストを知恵、霊と主張し、その知識を誇って自らを完成された者、完全にされた者と主張していた。こうした人々に対して、彼らが自らを誇るために用いていた「成熟した人」という用語をパウロは借用しながら、「十字架の言葉」を中心とするパウロの宣教を受け入れ、それにまったく従うキリスト者こそ真の「成熟した人」とであると反論しているのである。

・パウロはこのような人々(「十字架の言葉」を受け入れた人々)の間で知恵を語っているのである。その知恵は、この世に起源を持つものでは決してない。また「この世の滅びゆく支配者たち」(=ヘロデやピラトといった歴史的支配者と彼らの背後にあって働いている悪の諸勢力。これらは両方とも審判のもとにあり、神の計画に無知で、自らの栄光を渴望する存在に他ならない。「滅びゆく」とは、キリストの勝利が完全に地に現わされる時に向かって、確実に無になっていくことを示している)に属するものでもないと言う。

○「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。」(7節)

→パウロが語るのは「神の知恵」、それも「隠されていた、神秘としての神の知恵」に他ならない。

・「神秘」=⊕「ミユステーリオン」

→人の知恵によっては理解できないが、神がよしと見られる時に啓示される神の救いの計画のこと。終末のドラマを中心とした神の救いの計画の全体を指している。

・この神の救いの計画は、イエス・キリストを受け入れない者にとっては「隠され」たものに他ならない。しかしこれは、「神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる

前から定めておられたもの」だとパウロは言う。その具体的現れがイエス・キリストご自身なのである。私たちはイエスの事実を、この神の救いの計画として理解することが求められている。パウロたちが教会で語っているのはまさにこの知恵なのであり、十字架の福音とは別に何か特別な知恵を語っているのでは決してない。

○「この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」(8 節)

→「この世の支配者たち」が「だれ一人、この知恵を理解し」なかったことは十字架の事実から明らかである。ユダヤやローマの指導者たちがイエスを十字架にかけたその事実が、彼らによって代表される「この世の支配者たち」の無知を明るみに出している。

・「栄光の主」→キリストの權威を最高に強調した称号。この称号は「十字架」と切り離すことはできない。十字架につけられた主イエス・キリストこそ、信ずる者たちの与る栄光の唯一の源であられる。そしてキリストを信じて生きる教会は、キリストの十字架に与ることを抜きにしてキリストの栄光に与ることはできない。

○「しかし、このことは、『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです。」

(9 節)

→イザヤ書 64 : 3 と 52 : 15 からの自由な引用。

・この引用によってパウロは、神の御業は人間の見たり、聞いたりなどの自然な認識方法では理解できないことを示し(「目が見もせず、耳が聞きもせず」)、さらにその頂点として人間の知性の働き全体によっても認識不可能であることを強調している(「人の心に思い浮かびもしなかったこと」)。

・その神の御業＝救いの御計画(※これは終末において完成されるものだが、現在体験さ

れ、味わわれている恵みでもある)を、神は御自分を愛する者たちに準備されたのである。

- ・そして、それはただ聖霊によってしか認識することはできないとして、10節以下の霊論に入っていく。

○「わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してくださいました。

“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのです。」(10～12節)

- ・「聖霊」を強調したい時に「“霊”」を用い、単に「サルクス(肉体)」、「プシュケー(精神)」、「 Pneuma(霊魂)」の区別による「霊」と言いたい時に「霊」と表現しているように思われる。しかし、「霊」と言っただけで両者が重なっていることもある。
- ・聖霊は「一切のことを、神の深みさえも究め」る。そのことをパウロは人間一般の例をあげて説明する。「人のこと」はその「人の内にある霊」によってだけ真の意味で知ることができる。有限の存在である人間においてすらそうであれば、まして「神のこと」は「神の霊以外に」知る者はいないと強調するのである。
- ・わたしたちが神のこと、神からの恵みとして与えられたものを知るようになったのは、神から聖霊を受けたからであり、人間の知恵や霊によるものではない。そんなものを通してこれらのことを認識するのは不可能であるとパウロは主張する。ここには、あるものを認識するには、それと同性質のものによってしか可能でないという当時の考え方がある。すなわち神の知恵は人の知恵によっては理解できない。神が啓示される神の御心は、人の中に注がれる神御自身の御霊によってのみ認識されるという考え方である。

※今回の聖書箇所ではパウロが「神の知恵」と「この世の知恵」、「神の霊」と「人の霊」とを鋭く対立させている点を見逃してはならない。このようにパウロが「知恵」と「霊」について、それぞれ「神の」と、「この世」あるいは「人の」と二つの異なる種類に分け

ているのは、人間の「知恵」や「霊」を誇りにする人々がコリント教会にいたからである。そんなもので「神のこと」を認識することはできない。本当に大切なのは「神の霊」を受けて、「神のこと」を認識できるようにしていただくことである。こうした思い上がりを打ち砕き、「神の霊」を与えていただいた者同士として謙虚に仕え合う教会を形作るのがパウロの闘いであったと言えよう。

○「そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、“霊”に教えられた言葉によっています。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。」(13節)

・「神のこと」が聖霊によってしか認識できないということをパウロは述べたが、「これについて語る」、すなわち宣教においてもそれが同様であると主張する。コリント教会の一部の人々は自分が特別な知恵を持っていると誇り高ぶって、その知恵を振りかざすような形で宣教を行っていたわけだが、パウロたちはそんなことをしない。そんなことは不可能である。自分たちは聖霊に教えられ、導かれた言葉で「神のこと」を宣べ伝える、「霊的なものによって霊的なことを説明する」。このように、聖霊によって認識された神の御心を宣べ伝える宣教において主導的な役割を果たすのも聖霊に他ならない。私というのはあくまでも聖霊の導きのもと、神様に用いられる存在であり、そこに自らを誇りとするような要素は何一つないというのがパウロの考え。

○「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。」(14～15節)

・「神のこと」を認識するにしろ、宣教にしろ、聖霊に自らを委ねる奥義を体得した人々をパウロは「霊の人」と表現する。これに対し、あくまでも人間の知恵や霊を誇りにして「神のこと」を認識し、これを宣教しようとする人々をパウロは「自然の人(⊕)プシュキ

コス)」と表現し、一段低く見ている。

- ・この段階の人間は神の霊に属する事柄、すなわち神の霊によって教えられる知恵、「十字架の言葉」、福音宣教によって伝えられる救いのメッセージを理解することはできないとパウロは言う。それは「自然の人」にとっては「愚かなことであり、理解できないのである。
- ・信仰においては、神の霊が福音を聞く人の心に信仰を生み出し、福音を聞いて応答するように導くことが必要不可欠であり、信仰の事実はまったく神の霊の働きに他ならないとパウロは宣言する。
- ・さらにパウロは、自分も含めて「霊の人」がコリント教会の人々の勝手な好みによって評価され、勝手に派閥を作られていた状況に対して、「霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません」と語り、注意を与える。「霊の人」を裁くのはただ主なる神御自身であり、人間がその人を裁いたり評価したりするのはとんでもない思い上がりにはならない。

○『「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。』しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。」(16節)

→イザヤ書 40:13 からの引用。この引用によって、この世が神の知恵であるキリストの十字架を認めることができなかつたこと、また人は自分の力で神の御心を知りえないし、教えることもできないことを確証する。

- ・しかし、わたしたちはただ聖霊によってキリストの思い、またキリストにおいて啓示された救いの計画、福音宣教の内容を抱くことができたのである。これによって一致をするようにと勧めて、パウロは今回の聖書箇所を終えている。

#### 【今回の聖書箇所から思うこと】

○信仰においては、神の霊が福音を聞く人の心に信仰を生み出し、福音を聞いて応答する

ように導くことが必要不可欠であり、信仰の事実はまったく神の霊の働きに他ならない。このことを思えば信仰というのはまさに神からの賜物。自分の力で選び取ったものではない。

- 教会においては様々な人の証しを伺うが、それは当たり前の話だが、「自分がこのようにして信仰を選び取ったのだ」と自分を誇るものでは決してないものである。その人の招きにおいて現わされた神の御霊の働きを確認し、その栄光をほめたたえて皆で信仰を強められる、そしてこれからも皆に聖霊の導きが豊かにあるように祈り求めるのが教会において行われる証しだと言えよう。人の証しを聞くときは、このことをいつも念頭に置いておきたい。